

人は死すべき時に死してこそ、最上の幸福である。

特攻への道、石川師範学校本科一部・昭和十八年卒業組の場合

万葉歌人、大友家持の長歌「海行かば」の荘重な歌に背を押されるようにして、半年繰り上げて昭和十八年九月二十五日に卒業式があげられた石川師範学校。わたしの亡父のもうひとり、の学友で、卒業式前に海軍に志願した土山忠英氏は能美市上徳山村に生まれた。この地も山合に囲まれた村であった。近くの辰口上開発に住まう忠英の末弟の村中明石（八十五歳）さんを訪ねた。彼も朝倉正夫さんと同じく元教師であった。甥の土山信英さんが継いでいる土山家に案内していただき、そこでわたしは特攻に出た土山忠英の遺影と遺書を見ることになった。

昭和十八年十月に三重海軍練習航空隊に入隊した土山忠英。美幌基地から鹿屋基地に移る。やがて土山忠英は神風特攻帰一隊に属し、天山四機で台南新竹基地を発する。天山は日本海軍が九七式艦上攻撃機（九七式艦攻）の後継機として開発・実戦配備した艦上攻撃機。操縦、偵察、通信の三人乗り。土山忠英は偵察であり、中尉で指揮官。

昭和二十年五月三日に沖縄の海で天山に搭乗して特攻。戦死後、朝倉正一同様少佐に特進。七百六十三飛行隊、新竹基地ゆえ、朝倉と同じ台南航空隊の一員であったかも知れない。天一号作戦で、戦艦大和が沖縄の海で海上特攻し沈没したのは四月七日。忠英が特攻したのは、その一ヵ月後の薄暮時であった。聯合艦隊司令官告示二二三号。「我自爆ス隊員ノ健闘ヲ祈ル最後ノ勝利ヲ信ズ」の決別電を発して沖縄本島中城湾の敵巡洋艦に突入したと、土山忠英とともに南方で戦った友人の兄が平成七年に亡き土山孝（兄弟）宛ての手紙で書き送っている。

鉛筆で走り書きした遺書を見せていただいた。出陣の前日に当たりて一筆書き置きますと、便箋三枚に書かれている。土山は憂国の志士であるとともに、親を思う家長でもあった。「年二十歳を過ぎても何ら為すところを知らず」からはじまり、「最後に二両親の御健康を御祈りいたします」と締めくくる。「人間百歳の長寿を得て生涯を終わる者、幸福でありましょうか。二十二歳の若年にして人生の意義を知り、皇国の為に死なんとする者、果たして不幸でありましょうか。人は死すべき時に死してこそ最上の幸福であると信じます」の思いが心を打つ。自分には言い聞かせているようにも思える。大日本帝国に殉ずる精神に心ならずも同調させているのか、あるいは皇国の為に死なんとしていたのか、本当のことは知る由もない。土山忠英の遺影を見ると、飛行服を着た白いマフラー姿はちよつとこれから大空に散歩してくるよ、といった和やかに笑ってさえいる。生還を考えないで微笑むのは両親を安心させるためであろう。

後日、上徳山村で行われた葬儀の時、金沢から師範の清水堯晃校長が電車に乗って駆けつけ

てくれたとのこと。能美線の辰口の駅に迎えに行き、自転車の荷台に乗せて村に来ていただいたと、明石さんが教えてくれた。

なお、突撃した天山の操縦をしていたのは奇しくも旧松任市劍崎町出身の若い石場清一平等飛行兵曹であった。彼は石場家の一人息子であり、以来、戦後も土山家とは付き合いが続いている。

戦後、土山の亡き母ゆきさんは畑仕事をしながら、「忠英が乗った飛行機はあんなものだったのだろうか」と、空を飛ぶジェット旅客機を指差していたという。老いた母の心の中では息子は学生服姿のままであったと思われる。二十年ほど前、九段の靖国神社に参った帰りも羽田から小松に飛んでいる時、「忠英はこんなふうにして空を飛んでいたのかと、母は旅客機の中でずっと泣きっぱなしでした」と同行された義理の妹・村中武子さんが話してくれた。「人は死すべき時に死してこそ、最上の幸福であると信じます」と書き置いた忠英に無念の気持ちはなかったのだろうか。年老いて生きたことを納得して死ぬ者と、若くして生きたい思いを残して死ぬ者の心の差は大きいと思うが…。

この土山、朝倉両学生は特攻で散華した予備学生十三期およそ千六百名のほんの二人である。十三期では三人に一人が戦死したと言われている。「海行かば」の歌に送られ、若い命を国に捧げた彼らに、今を生きるわたしたちほどのような顔をして向かい合うことができるだろうか。平和を享受しつつ、見知らぬ人に平気で詐欺を働き、家族を容易く殺める風潮を誇ることができようか。国破れて山河ありというものの、美しい山河は消え、人の真の姿が見えなくなってしまっているように思える。この国が国民主権から国家主権に移りつつあるような中、今十二月八日を迎えて、前の大戦で行われた史上類を見ない「特攻」から、生命や国、家族について考え学ぶことは多いはずだ。